

緊迫した活動を振り返る泉川院長（右から2人目）や時津さん（左から2人目）らメンバーたち
—南島原市深江町、泉川病院



独自に小規模、迅速支援

生きた 普段の野営訓練

泉川病院（南島原市深江町、泉川卓也院長）は東日本大震災時の支援経験を踏まえ、院内に災害支援チームをつくっている。雲仙・普賢岳噴火災害時に各地から受けた支援への恩返しも含め、災害直後の現場で「サーチ&レスキュー」を目標に、気候が過酷な真冬や真夏に野営訓練を重ねてきた。

泉川病院チーム

今回は20〜40代の医師や看護師ら8人が4月15、16、19、22日に熊本県益城町で活動した。トラックなど車3台に、おのやミニバイク、食料、テントなどを積んで現地に入った。最初の2日間は町役場から約200mの駐車場に拠点テントを設け、被災家屋などのマップをつくり、倒壊現場で救出と治療などに当たった。

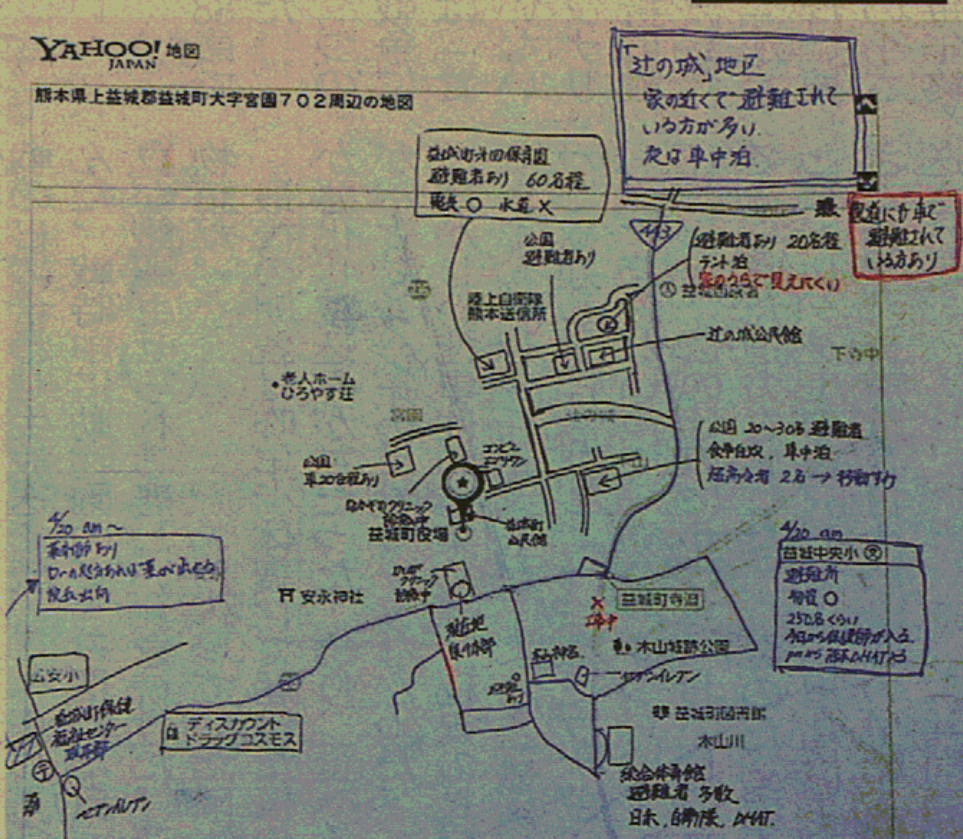
本震3日後からの後半4日間は、地元病院の敷地を借りて拠点テントを設営。けがをした被災者の外傷の縫合や消毒、抜糸、

夜間の避難所見回り、声掛けをした。

16日の本震の際は、探索中の職員3人のすぐそばで、民家が相次いで倒壊した。臨床検査技師の時津直史さん(41)は「あと一步で巻き込まれていた」と現地の危険な状況を振り返る。泉川院長は「メンバーにとっても衝撃的な地震災害だった。メンバー全員、生きて帰って来られてよかった。活動は、付いてきてくれた職員や快く送り出してくれた家族らの理解のおかげ」と感謝を口にする。

普段の訓練の成果が生き、個人経営の病院による独自の小規模チームが、軽いフィットワークで動けたと手応えを感じているという。ただ、泉川院長は「今回は運良く警察などと円滑に協力し合えたのでよかったが、日頃から本県や島原半島内などで合同訓練があつていい。大小さまざまな機関で、もっと連携を密にしておく必要がある」と、有事に備える態勢強化の重要性を指摘する。

院内チームとしては「機動隊のチェンソーなどがなければ、助からなかった命も多かった」として、装備品を見直す検討を早速、始めた。（板倉聖教）



被災状況が書き込まれたマップ